

～群れて遊ぶ～

6 里山で遊び暮らす子供達に心の原風景を



宮崎 栄樹
MIYAZAKI Eiju

木更津社会館保育園園長/木更津社会館土曜学校校長

千葉県木更津の街にほど近い里山で、旧農家「佐平館」を核に、土曜日に小学生が集まり自然体験をする「土曜学校」が開催されている。子供達は里山で過ごす中でどのように遊び、また里山は子供達にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

森の学童保育「土曜学校」の原点

「9歳の節」があるといわれます。そこでは人の感情の大枠が出来上がり(自己感情の成熟)、抽象的な思考が始まり(現象を分析し総合する認識能力)、自分と対立する考え方を推定し(自己対象化)、その考えに立って推論が可能になり(現実・感情を超越した論理的な思考力)、「自分は生まれてきて良かったのだ」という、父母家族を含めての自己肯定感がひとまず完成します。生れて10年間の、この成熟過程の中核にあるのは、「感情と直感的な状況認識・状況判断力」の深化過程です。

イギリス古典派経済学の始祖ジョン・スチュアート・ミルの悲劇は、同年代の子供達とは遊ぶことなく、過度の英才教育によって自己感情の成熟を後回しにして、論理性を極度に洗練させられた結果でした。彼は、20歳になっていたある日、自分が1人の女性を心から愛する感情を持っていないことに気付いて愕然とします。このミルの悲劇が、森の学童保育「土曜学校」の原点なのです。

学童保育所「社会館ポブラクラブ」の土曜日版

2002年4月土曜学校は、木更津第二小学校区の学童保育所「社会館ポブラクラブ」の土曜日版として始められました。既に一般の会社等では、週休2日が普及し始めており、学童保育所に子供を預ける何人かの親たちは、「土曜日の学童保育は要らない」と言い出し始めていました。もちろん他方で、土曜日の学童保育を必要とする親たちはいます。彼らへの支援体制を維持しながら、土曜日は、休んで良い子



写真1 土曜学校の核となる「佐平館」

供達が休めるような料金体系を作った上で、「土曜日だけの森の学童保育所に来たい」子供達の受け入れ口が作られました。

「森の保育」「土曜学校」の現場監督と特別講師

土曜学校に先行して、1999年3月には木更津社会館保育園「森の保育」が始められており、その効果や可能性を私は既に感じ取っていました。森の保育で育まれた子供達の感覚が、小学校に上がって更に研ぎ澄まされていったらどうなるだろうか。そして「土曜学校をやってくれませんか」という私の問いかけに「面白いかも知れない」と、森の保育の現地指導をお願いしていた直井洋司氏は応えてくれました。彼こそが、森の保育と土曜学校の現場監督であり、子供達の憧れの的なのです。彼の理解と協力があって、今日の「里山保育・学校」が存在します。現地



写真2 里山の探検

写真3 米の収穫(もみすり)

写真4 水辺の生き物捕獲

の多彩な特別講師群も、彼が主催するNPO法人「房総自然ミュージアム」のメンバー達なのです。

10名近くの特別講師達は、①畑関係、②畑の腐葉土関係、③水路関係、④おやつ作り、⑤田んぼ関係、⑥リヤカー、⑦空中ブランコ、⑧昼食作り、⑨ドジョウの身体測定、⑩朴の葉大賞等々書き切れないほどのことを子供達に教えています。

特別講師達の多くは、自ら「森林療法」の恩恵を求めてここに来ています。特に高校の生物の教員の方は、任せられた田んぼにすることが多く、そこに子供達が来ても来なくてもどちらでも良いことが明確です。「来る者を拒まず、去る者を追わず」です。また水産試験場の職員の方は、この地域の水生生物に関心を持っていて、私があちこちの田んぼや山林等を交渉して確保し、農業を止め或いは減らした結果に期待し、谷津田の観測と調査を続けています。さらに合気道の師範の方は、合気道とロープワークを教えるために来てくれていますし、分解担当の自動車修理工場主は、車の分解を子供達と一緒にしています。直井氏は「命」について、子供達に何かを伝えていこうとする配慮を怠りません。

一方、3名のスタッフの役割は、出欠確認に始まって安全確認に終わります。スタッフ達は、子供達が事故を起こさないように心配りし、孤立している子に目配りをします。喧嘩の推移に注目し、見えない所にいる子供達に「スタッフが気を付けているよ」という信号を出します。

土曜学校の流儀

・その1:何にもしなくても良い

護身術のための合気道以外、子供達は自由参加です。つまり一日中何もしなくても良く、食事もとらなくて良いのが土曜学校の憲法第1条の条文です。何を感じ何を求めるのかを、全て内発的に自分で決めて欲しい。「自分の存在の根元が自分の心の奥にある」と確信している子供達が、土曜学校では徹底

して養成されているということです。

・その2:評価は仲間が決める

土曜学校には大人からの通知票や評価がありません。このことは、学校と全く違う評価がなされているということです。子供達が暗黙裏に評価し合います。しかも、上級生達が仲間や下級生達によって評価されます。

学校と全く違う評価基準とは、例えば里山に必要な知識(食べられるもの・火のおこし方・道具の使い方など)をたくさん持っていることです。自信もありリーダーになりたいのに周りについて行かない上級生がいます。その子は同年代の仲間とだけ遊んで満足するしかありません。下級生の面倒など見たくないの、下級生も近付かず人望もないのです。

・その3:理想の上級生をまねる

下級生が寄り集まる英雄の人気条件があります。それは①人の心を読む、②下級生とも遊んでくれ面倒見がよい、③おこぼれをくれる、④傍にいて何か面白いことをやってくれる、⑤独特の世界を持っているなどで、たぶん昔のガキ大将の資質が求められています。

土曜学校での理想の上級生とは、下級生、その中でも弱い子達の心をくみ取れる人のことです。欲張らない人のことのようにです。ナイフやナタの使い方がうまい人です。秘密基地を作って1日中そこにいて、昼食もお握りだけで済ましてしまう人のことです。秘密基地に下級生をそっと入れてくれる人です。マッチを自分でいつも持っています。時に自分で卵・小麦粉・芋なども持ってきて、勝手に料理をして皆に振る舞ってくれます。下級生はこれらをじっと見ていて、最上級生になると早速、自分で同じことを実行に移すのです。

感情表現や自己判断をしない1年生問題

社会館の外から来た1年生には、以下のような子供が多いのです。



写真5 できあがり待ちどおしい昼食作り

写真6 “秘密基地”施工中

写真7 3歳クラスの夏。一同爆睡中

- ①火の怖さを知らない。燃えている枝を素手で持ってしまう。(自然体験不足)
- ②田んぼでの汚れ方が下手。(自然体験不足)
- ③1つ1つスタッフの許可や指示を求めてくる。(自由であることを知らない)
「トイレに行って良いですか?」「どこでご飯を食べるのですか?」「『頂きます』は言わないのですか?」「片づけはいつですか?」
- ④社会館の先輩達の感情表現の直截さに戸惑う。圧倒される。(自己感情の湧出を恐れている)
- ⑤喧嘩を大人達が止めないことに当惑する。自分たちで解決しない。大人の援助を待っている。(子供集団の中での自律のレッスンをしていない)
- ⑥スタッフにつきまとう。(大人への依存を当然と心得ている。)

このような問題を抱えていた彼らも夏明けぐらいから体力もつき、行動範囲が広がり、社会館流の激しい感情表現に対抗できるようになります。森の常識も身につく、家庭や学校での自分と違う素顔の自分を生きようになります。ちなみに森の常識の核心とは、ルソーが『エミール』に書き残した「自然罰」体験のことです。大怪我は別として、自己の痛みや失敗の責めを母親や大人達に求めず、黙って自分で引き受けられることを言います。

大人の顔色を伺わなくて良い

これは社会館保育園生徒の行動原則です。それが土曜学校でも保たれています。2人称に着目するなら、直井氏も「なおいようじ」という子供の呼びかけを最初から肯定してきました。子供への大人からの呼び捨ては当然として、その逆には抵抗感を持つ大人達います。が、土曜学校校長の私は、大人達が「〇〇先生」と子供達から呼ばれて墮落することを恐れています。この社会館流は、大人と子供が平等だからではありません。大人と子供が平等である場所は、たぶん裁判所の中の非常に狭い範囲に限られま



写真8 雨の日は詩の朗読も

す。子供と大人が平等である筈がありません。

子供らしい要素の一つが、感情表現の率直さにあります。感情が9歳までに一応完成するとしたら、それまでの感情は用心深く耕され放出され、めいっばい、時に爆発的に表現されるべきです。表現されない感情は腐ります。9歳までの子供は、大人達の顔色を伺うようであってはなりません。表現において嘘つきになるのは、10歳からで良いのです。

時には思い切った喧嘩や意見対立も

孤立を恐れていると思いついた喧嘩や意見対立ができなくなります。土曜学校では死角も多い上に、大人達が喧嘩を容認していますので、色々な機会に意見対立、物別れ、喧嘩が可能です。

里山での喧嘩はオープンで優しいと人は言います。喧嘩の後の感情処理に、里山の広さはとても有効です。相沢さんがいつも1人で作業している相沢田んぼであったり、佐平館の焚き火の周辺にはいつも誰かがいて、誰が来ても何気なく受け入れてくれます。独特の世界を持っている子供達が孤立していても、あまり気にされたりしないで済むのが佐平館の雰囲気です。

独特の存在感を持った子供がいました。ずっと孤立気味であった彼でしたが、9歳の節を越え、5年

生になってから俄然自信を持ち、土曜学校の下級生から絶大の信頼を勝ち得、英雄的な存在になりました。今はもう高校1年です。

自己感情、自己肯定、独立の気概のすすめ

NHKでも放映された「七神池」は、果樹園の脇を掘り、溝を掘って水を引いてきた手作りの池で、7名の5・6年生が始めた“プロジェクト”でした。そこにはすぐに1・2年生を含む15名程が出入りすることになります。とても面白そうなのですが、下級生達は初め何をしたらよいのか判断できません。池に砂利を敷く。生き物の楽園にするために、水草を集めドジョウを捕まえてくる。これらの作業は、上級生の指示があって始められたことですが、上級生達も土曜学校では、下級生達を支配しようとはしません。

相沢田んぼにも、興味を持った子供達だけが集まります。大人を疑わず、その一挙手一投足に目を凝らして観察する子供達。

人との距離の取り方とは、自己主張の仕方ということです。単独行動と2人ペアの行動と大勢の集団行動とを必要によって柔軟に使い分けること。いつも自分専用の子分やお友達がいないと生きていけないというのはダメです。連携も孤立も、トップもサブも末端も、どんな役でも自らの状況判断でできるということです。まず自己感情、自己肯定、独立の気概があって、初めて人は連帯し連携すべきなのです。「孤立を恐れずに連帯を求める」ための自立能力・自己信頼はとても大切です。そのためには、個室・独房に自分を置いてはダメ。安心できる家族という根拠地を持ちながら、屋外の自然と仲間達と信頼できる大人達の中で、ありのままの自己表現と意志決断を試みるべきなのです。笑われたり、恥をかくなどの小さな挫折体験は、少年時代にはとても痛切であり、しかも大切です。失恋はその延長上にあります。「道は必ずどこかに通じている」という予感・確信を得て人は青年期を迎えるべきです。

里山の無数の死角は空想の源

空想夢想は9歳までの子供達の特権です。里山の無数の死角は子供の空想の源です。里山の曲がり



写真9 子供の時間を生きる

角、ゆったりとしたカーブも、空想と無意識の安心・不安を喚起します。藪こぎは気持ちがいっぱいに張りつめる体験です。向こうが見通せない地点は不安と妄想を呼び覚まし、周り中からお化けが襲って来そうです。森の中の秘密基地は、ゾクゾクとするような緊張感と別荘にいるような幸福感をもたらしてくれます。空想が途切れることはありません。

人生の素晴らしい原風景を

かくして基本的には「学童保育所」でありつつ、同時に「森・里山の自然体験学校」でもある「土曜学校」が発足して7年が過ぎました。その基盤になっているのは、木更津社会館保育園園長である私の「少年時代の原風景が一生を貫いて人を支える」という保育哲学です。また、木更津社会館保育園請西南台分園の施設設備であり、さらにその里山一帯の農業者達のほとんどが帰属する菩提寺自性院の住職でもある私の信用度でした。

日本の農業は後継者の確保に失敗して、崩壊の瀬戸際にあります。木更津のこの地域も同様です。私たちの企画が子供達のためばかりでなく、結果として農地の保全に繋がり、農業者達の生産意欲、食糧自給率の向上にも繋がることを願っています。

学校ビオトープを全面否定するつもりはありませんが、自然循環が成り立つ規模で、昔からの農地で、昔私たちが遊ばせて貰ったあの広い里山で、子供達に子供の時間を生きて欲しかった。これからも彼らに人生の素晴らしい原風景を用意してあげたい。